

新聞報道

新聞報道1

中島教授の記事「エボラ 県内でも対策強化—指定医療機関や港湾施設 準備進む—入国時に申告、良識ある行動重要」が2014年11月5日(水)の産経新聞朝刊にて大きく紹介されました。

23 (神奈川) 13版 平成26年(2014年)11月5日 水曜日 産経新聞

エボラ 県内でも対策強化

入国時に申告、良識ある行動重要

エボラ出血熱の疑いがある患者の確認の流れ

ウイルス学が専門の聖マリアンナ医大(川崎市富前区)の中島秀喜教授(61)にエボラ出血熱について聞いた。

「エボラ出血熱はどんな病気か」「骨と骨格以外の全ての体細胞に感染し、感染成立後の増殖能力も非常に強い。病気が進行すると全身から出血したり、多臓器不全を起こす。血液の凝固成分を作る肝機能が低下するなど悪循環が生じると、大出血を

起こして死に至ることもある」

—治療薬はあるのか

「現時点で、特別な治療薬はない。しかし、日本のような医療先進国ではきちんとした対応をすれば、死亡率は抑えられるだろう」

—国内流入や、国内での感染拡大を防ぐにはどうすれば良いのか

「水際の対策と同時に、一人一人がきちんと入国の際に申告するという良識ある行動が重要。また、初期の症状は風邪に似ているので、診察する医師は海外渡航歴をきちんと聞くことが大切だ」

—感染の疑いがある人は、どう行動すべきか

「早期に適切な医療機関を受診することが大切だ。重病ではあるが、早い段階で適切な治療をすれば治る可能性はある」

聖マリアンナ医大 中島秀喜教授

指定医療機関や港湾施設 準備進む

2014年(平成26年)11月5日(水曜日)
産経新聞 朝刊 23面(神奈川) 13版

神奈川

エボラ出血熱 エボラウイルスによる感染症。1976年にザイール(現コンゴ)などアフリカ中部で初めて集団感染が確認された。患者の血液や体液などに傷口や粘膜が触れることで感染する。空気感染はないとされる。2〜21日ほどの潜伏期間の後、初期には発熱や頭痛などを発症。進行すると全身から出血することもある。致死率は25〜90%と高く、有効なワクチンや治療法はない。厚生労働省は感染症法に基づき、危険性が極めて高い1類感染症に指定。全国45カ所の指定医療機関で隔離するなどの対応に当たる。